

2017年度学校自己評価

はじめに

現制度で10回目となる2017年度の学校自己評価は、従来と同様、各専任教員が、生徒による授業評価、保護者の本学院の教育に対するアンケート等を参照した上で、授業・卒業論文・クラブ活動・研究活動等について評価し、さらに本学院内の教務室・各委員会・各学年・事務所等がそれぞれの活動の評価を行なった。そしてその上で、学校評価運営委員会がそれらを理念・目的、教育活動、生徒、研究活動、教育研究施設、社会・大学との連携、管理運営の6項目にまとめて評価を行なった。15年度に始まったカリキュラムが完成年度を迎え、2つめの生徒寮（梓寮）が竣工し、新体育館建設も開始された17年度であるが、本自己評価が18年度以降の教育・研究の改善、さらには20年の大学入試改革や22年度に施行される新学習指導要領への対応に資することを望むものである。

I. 理念・目的

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、00年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田からWASEDAへ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すとした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

本学院も「Waseda Vision 150」に関連し、12年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院は、早稲田大学教旨・「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいて教育・研究活動を行なうことが目的である。生徒に対しては、知的関心を高め、論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は17年度においても変わっていない。

Ⅱ．教育活動

①授業

a．カリキュラム

17年度は現カリキュラム適用3年目の完成年度となった。カリキュラムは1年次から3年次まで各年度32単位構成で3ヵ年96単位となっている。1年次は芸術科目の音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。第2学年ではゆるやかな文・理選択分けを行なっている。すなわち文系、理系それぞれ5時間分の選択必修科目を履修する。この際、文系選択は数学Ⅱ（3単位）、古典講読（2単位）とし、理系選択は数学Ⅱ文系（3単位）、物理（2単位、うち1単位は「科学課題研究」）である。第3学年は32単位のうち、共通科目（15単位）、必修選択科目（12単位）、自由選択科目（2単位）、総合的な学習の時間（2単位）、HR（1単位）の構成となっていて、文系と理系では必修選択について科目および科目数が異なる。前者は6科目12単位、後者は4科目12単位である。また「総合的な学習の時間」は、「大久保山学」（1単位）、「課題探求」（1単位）という構成で、「課題探求」はさらに「卒業論文指導」及び「修学旅行事前学習指導」に分かれる。

b．必修科目

17年度の必修科目の授業計画は、例年通り、前年度の生徒の授業評価結果の分析・検討に基づいて作成している。すべての教科においてシラバスを年度初めに作成しそれに沿って授業が展開された。各教科で、第1学年では主に基礎学力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識した展開や第2学年では学力の充実・発展の観点からの構成を考えた。第3学年では学部教育との連携を意図して、各学年、各科目の特徴を捉えて授業を行なった。従前から、生徒の授業評価の観点項目にある「わかりやすい授業」、本学院ならではのオリジナリティーの追求、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、社会との関わりを認識することなどが目指された。具体的には理数教科で学部教育の基礎となる学力の強化をはかる様々な取り組み（例えば数学の放課後の補習など）を行なった。さらに語学や人文社会科学系の科目では、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業も多く、またプレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。

c．選択科目

本学院のカリキュラムの特徴として、第3学年に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第2外国語（仏、独、中国、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修と自由を併せて合計7科目14単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、早稲田の一員ということを認識させるものが多く設置された。例えば「早稲田大学と文学」では、文学研究の初歩的な方法を学び、早稲田大学への「文学場」としての認識を強めることが目指された。

d．英語テスト

4月にGTEC-S、9月にTOEFLもしくはTOEFL Juniorと、年2回全校一斉に授業日

に英語テストを実施した。これはいくつかの学部で英語力が進学の際の資格要件として課されているということ、どの学部からも調査書と共に英語の外部テストスコアの提出を求められていることに対応する方策でもある。

e. 大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、科目横断型の学習教育プログラムとして、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとした。そもそも大久保山学とは何か。これは本学院を取り巻く類まれな自然環境や歴史的遺産を、生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となる。地理的には本学院は浅見山丘陵に位置し、面積は70数ha、長辺は1.5kmに及び、旧校舎が建つ尾根筋および旧グラウンドを含む一帯が「大久保山」という字名であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。この丘陵地帯には開発の際に発掘された古代の埴輪や土器などの夥しい出土品があり、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、大久保山全体が歴史的遺産と位置づけられる。また「希少野生動植物」に指定され保護対象となっているオオタカをはじめ、多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに本庄キャンパスの周辺には小山川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」（12年11月公開）の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして13年のWaseda Vision150の中で、「地域の特色を活かした

「森に想い土に親しむ」教育を一層発展させた「大久保山学」をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」としたのである。授業は木曜日2時限目、8講座同時開講とし、前期と後期で異なった講座を履修する Semester 制とした。生徒は大久保山と地球環境、本庄市周辺の文学、不確実性下における意思決定や大久保山の植生と森林生態学等の科目によって構成される8通りの組み合わせパターンのひとつを選択することとした。実施初年度であったが、各教科で連携を図りながらユニークな授業が行なわれた。

f. 課題探究

新カリキュラム完成年度である17年度は第3学年の木曜3限に総合的な学習の時間「課題探究」が設定された。この科目は第3学年の組主任8名で担当し、年間20回の授業を修学旅行関連学習11回、卒業論文指導9回の2種類で実施した。また学年集会（ガイダンス・学院長による修学旅行関連講話）や学年行事（文系教育実習生によるパネルディスカッション）との関係も図った。

修学旅行関連学習では、事前学習の全体講義を2回、北京・韓国・台湾のコース別事前学習8回（ガイダンス、班決め・実行委員決め、しおり作り、交流時のグループ分けと発表準備、結団式）を行ない、事後学習1回（アンケート）を行なった。修学旅行不参加者については、PC室にて卒論執筆作業を行なわせた。

卒業論文指導の1つとして、GECライティングセンターによる講義を3回行なった。同センターは、アカデミック・ライティング（学術的文章を書く技術）のル

ールを踏まえ、分野の別を問わず早稲田大学の学生・教員の「書く」ことをサポートしてきた実績をもつ。本学院の多くの生徒が学部進学後も同センターの指導を受けることになるので、高大連携・高大一貫教育の観点からの学習効果も期待できるわけである。

講義の概要は、以下の通りである。

第1回 4月13日（木）「卒業論文を書くための基礎講座 1」

「1. 早稲田大学ライティング・センターとは？／2. 論文の一般的な構成／3. アイディアから良い問いを作る！」

講師：坂本麻裕子氏・中島宏治氏 会場：学院食堂

第2回 6月22日（木）「卒業論文を書くための基礎講座 2」

「第1部〔理論編〕引用ってなに？／第2部〔実践篇〕キーワード引用をしてみよう！」

講師：嶼田大海氏・千仙永氏 会場：稲稜ホール

第3回 11月2日（木）「卒業論文を書くための基礎講座 3」

「論文の仕上げ方 パラグラフ・ライティングで各段落や全体構成を整えよう！／講義・練習問題・自己点検」

講師：外村江里奈氏・崔紗華氏 会場：学院食堂

この取り組みが生徒にどのように影響したのかについて把握すべく、卒業論文提出後に第3学年全員を対象としたアンケート調査を行なった。全3回それぞれの講義内容について、1「卒業論文を執筆する上で役に立ったか」、2「卒業論文を執筆する上での刺激になったか」、3「時期は適切だったか」、4「会場は学びやすい環境だったか」および「そう答えた理由」を、選択させた。回答結果の分析を、以下に略記する。

講義内容について「役に立った」「刺激になった」と感じた生徒が半数存在したことに、大きな意義を感じることができた。講義内容と執筆進捗状況とのマッチングについても、おおむね適切であったようである。しかし、「食堂」でワークショップを実施した際（第1回・第3回）の会場への不満は顕著であり、コーディネートした側からいえば、環境の不備がなければもっと有意義な学びを提供できたであろうと悔やまれる。今後は、ライティング・センターと相談の上、次年度に向けて最良の学習効果を得られるような環境整備を、模索していく所存である。

卒業論文指導としては、また、理系教育実習生によるパネルディスカッションを1回、組主任によるクラス別指導を5回実施した。

第3学年の教育活動の核となる修学旅行と卒業論文について、授業時間での指導・準備が行なえたことの意義は大きかった。この科目の設置によって、放課後に生徒招集の必要が多かった16年度までと比べ、生徒・教員の準備活動に余裕と深みをもたらした。一方で、17年度は顕在化しなかったが、毎年ごく少数ながら存在する学部進学辞退者への対応・指導が今後の課題である。

g. 卒業論文

16年度より卒業論文評点の高騰化への対処、書式の統一などの指導体制の改善を進めてきた。背景としてそれまでの指導方法や回数・評価にいたるまでの全てが担

当教員の裁量とされ、評点や指導負担などの公平性においてバランスを欠くような現状を生んでいたためである。これらを改善すべく、学年の生徒全体が同じ指導を受けることができる体制や内容を試行した。「総合的な学習の時間」の「課題研究」の時間を卒業論文指導に充て、生徒が自身の追究するテーマを専門とする教員と1対1で個別指導を受ける体制に加え、授業時間内での卒業論文指導を行なった。

「課題研究」における卒業論文指導は、（ア）ライティング・センターによる全体講義：前掲、（イ）第3学年教員による全体指導：本学院が発行する執筆指南書『卒業論文を書くにあたって』や教科書『課題研究メソッド』（岡本尚也編著、啓林館）等を使用し高校生の実状に即した内容や、分野・領域に踏み込んだ指導、

（ウ）ホームルームでの指導：執筆が終盤にさしかかる時期に、各クラス組主任によるホームルーム単位での指導によって実施した。

17年度の成果として、評点90点以上の卒業論文は13本となり、評点高騰傾向は抑制された。個々の教員の指導と「評点90点以上の卒業論文は、卒業論文発表会または慶応湘南藤沢中等部・高等部における発表会での発表候補になる。」という規則が導入された影響も大きいと考えられる。

卒業論文の全体指導が行なわれた結果、論文を書く意義、剽窃・引用・資料の扱いなどにつき、より深く生徒は心掛けるようになったと思われる。また、教員側からみた公平性、論文形式の統一、評価の再現性など改善された感がある。ただし、本学院における卒業論文の位置づけは、高校生としての精神的・知的発達レベルを考慮し、評価に当たっては執筆につぎ込んだ「熱意」を大きく考慮する旨の申し合わせがあった。しかし、近年の卒業論文評価においては、本来の論文としての評価に近づける教員の意識が多く見られる。これは議論を要する問題であるが、近年の傾向を評価の基本とするのであれば、それぞれの専門領域での評価であり、評価の公平性を保つ事は非常に困難になる。そもそも本学院教員の平均的資質が論文を審査することに耐えうるか、まず問う必要があるのではないか。

卒業論文担当教員のみ裁量で指導・評価されたために生じた不都合を改善する一方、新たに生じる問題にも対処する必要があり、バランスの取れた対応が求められるところである。卒業論文指導の均一化・徹底化を追求するあまり、萎縮した論文が増えることが危惧される。

なお卒業論文の学外公開についての指針が設定された。

②課外教育

a. 早慶野球戦観戦

5月27日（土）に第1学年として、東京六大学野球（早慶戦第一日）の観戦を実施した。交通機関の乱れもなく、遅刻者はいなかった。当日は天候にも恵まれ、つつがなく、観戦を終えることができた。試合は、途中、早稲田が逆転をし、おおいに盛り上がったが、最終的には負けてしまった。しかし、第1学年の生徒はみな、楽しそうに観戦をしており、早稲田の一員となったことを実感できたものと思われる。

b. 体育祭

6月1日（木）に実施した。4月から体育行事实行委員会を開き準備を進めた。また陸上競技部員が審判員をはじめとする競技運営に携わり、実行委員と共に運営を行なった。100m・200m・400m・1500m・本庄スペシャルリレーの個人トラック種目、走り幅跳び・走り高跳び・砲丸投げの個人フィールド種目、障害物競争・パン食い競争・三人四脚競争の個人レクリエーション種目、大縄跳び・綱引き・クラス全員リレーの団体レクリエーション種目をクラス対抗で行なった。真剣に競技に臨むクラスメイトをクラス一体となって後押しする姿が本行事の象徴である。新しいクラスでのコミュニケーションとまとまりが急速に進み、また第3学年の生徒にとってはクラス対抗で行なう最後の体育行事であり、高校生活の思い出となる貴重な行事であると感じられた。

また、実行委員並びに陸上競技部員を中心とした運営役員の手際の良い運営作業により行事全体が非常にスムーズに進んだ。

c. 人権教育

10月18日（水）の放課後に講演会「スポーツを通じたボランティア・支援を考える」を開いた。講師は視覚障害ランナー伴走者である鈴木邦雄氏、視界障害ランナーの高澤節子氏、同じく視覚障害ランナーである和歌幸代氏に依頼した。和歌氏から携帯電話や色の識別の例などについて、高澤氏からは盲導犬への注意事項などについての話しがあった。講演の後半は、グランドに移動して講師の指導により、生徒達が実際に目隠しをして視覚障害ランナーを疑似体験した。

d. 球技大会

第3学年修学旅行期間の10月19日（木）に第1・2学年で実施を予定していたが、雨天のため中止となった。

e. 秋の学年行事

10月20日（金）に第1学年の学年行事として遠足を実施した。新しい試みとして、クラスごとに目的地を決めた。以下の通りである。

A組：群馬・長野 B組：秩父 C組：横浜・中華街 D組：榛名湖・伊香保
E組：長野 F組：群馬・長野 G組：長瀬 H組：群馬・長野

当日は、あいにく雨にふられてしまったコースもあったが、それも一日中ではなく、すべてのクラスが予定の行程を終えることができた。1日、クラス単位で行動をともにすることで、クラスの結束を強めることができ、一定以上の効果があったものとする。一方で、8コースに分けたことにより、引率が組主任1名のみとなったことは、反省点であるといえるかもしれない。

f. 稲稜祭

10月28日（土）・29日（日）に開催した。運営は主に稲稜祭実行委員会（48名）によって行なわれた。1日目の昼過ぎから雨となり、中央ステージの移動、プログラムの変更が生じたが、生徒は臨機応変に対応していた。発表・展示の内容は、学院生企画・同窓会企画に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・本部企画で構成された。17年度は「百花繚乱」をテーマにいろいろな改革が生徒自身の力により行なわれた。また16年度に引き続き、校内装飾に力が入れられた。

g. 芸術鑑賞教室

11月15日（水）に本庄文化会館で実施した。内容は音楽「邦楽・津軽三味線・和太鼓」（あべや・若獅子太鼓）で、津軽三味線の全国大会優勝の経験を持つ兄弟による1時間半程度の公演であった。演奏のレベルが高いだけでなく、生徒参加型の太鼓体験や、曲の合間のMCも巧みで、エンターテインメント性の高い公演であった。

h. マラソン大会

12月14日（木）に実施した。体育授業の一環とし、男子約10km、女子約5kmの大久保山周辺をめぐるコースで行なった。途中棄権者1名を除き、参加者全員が完走した。

i. 課外講義

保健関係の課外講義として、以下の3件の講義を行なった。

第1学年対象「こころの健康」（5月25日（木））

第2学年対象「青年期のセクシャルヘルス」（6月15日（木））

第3学年対象「依存症の実態と予防」（7月13日（木））

このうち、第3学年対象の講義は、昨今の高校生の健康問題を鑑み、従来「飲酒・喫煙・薬物乱用予防」として実施していたものを、「依存症の実態と予防」としたが、ネット依存も含めた内容で、有意義な講演となった。

③課外活動

a. 生徒会活動

生徒会活動は生徒会公認団体活動（部活動）や生徒会の専門委員会活動など生徒会の活動すべてを指すこともあるが、ここでは選挙によって選ばれた生徒会執行部の役員たちの活動について述べる。主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加、稲稜祭生徒会ブースの運営であった。17年度の役員も、前年度に引き続き、生徒会活動をより活発にしようとする姿勢が大いに見られた。特に校内美化の啓発のためにクリーンプロジェクトを立ち上げ、ポスターを作成し、校内や通学バスへの掲示を行なった。また、本庄市内の高校の合同文化祭である「六高祭」について、学内の調整や他校との連携の窓口を務めるのも生徒会執行部の役割となっている。

b. クラブ活動

17年度は16年度と同様、文化部門25、体育部門16のクラブが活動した。クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。各クラブの17年度の主な成績、活動状況は次の通りである。

・硬式テニス インターハイ男子シングルス2回戦進出

・サッカー 健全な心身の成長・発達、優れた競技成績を収めることが目標

全国高校総体予選埼玉県大会・全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会
ベスト32、高円宮U18埼玉県2部リーグ9位

・スキー 男子1名、学生総合体育大会兼インターハイ予選・埼玉県新人大会出

場

- ・ソフトテニス（女子） 個人戦、インターハイ・関東大会出場
- ・ソフトテニス（男子） 個人戦関東大会出場
- ・バドミントン（男子） 活動方針を生徒が話し合う
- ・バスケットボール（男子） 単純に競技を行なうだけでなく、競技を通じて「感謝・感動・成長」を体現し、周囲を明るくさせることを共通認識とする
- ・野球 夏季大会 3 回戦進出 努力の過程で生徒は多くの発見をし、成長した
- ・EMANON 部員間の親睦を深める
- ・化学 イチゴや梅の実を用いた浸透圧の実験や自然にある植物を透明プラスチックに閉じ込め、標本とする
- ・軽音楽 六高祭・合宿・稲稜祭を中心に活動
- ・政治経済部 日経 STOCK リーグ高校部門入選（応募 960 チーム中、入選 35 本）
- ・ディベート 関東甲信越地区大会（夏季）奨励賞
- ・美術 自由な制作活動を重んじ、そのための責任を共有していくことを徹底

④国内外交流

a. 修学旅行

17年度は10月16日（月）～21日（土）5泊6日の日程で実施した。生徒は各自の希望によって3コースに分かれたが、結果として北京71名（男38名・女33名）・韓国129（男83・女46）、台湾107（男67・女40）となった。またクラブ活動の大会等での不参加者が36名（男33・女3）いた。

国際情勢の影響で、特に韓国コースの実施が危ぶまれたが、旅行会社や大学国際部の事前リサーチ、学院長・教務の周到な対応により、大きな混乱もなく予定通りに実施することができた。

北京・韓国コースは北京・ソウル市内の同じホテルに5連泊、台湾は台北3泊、台中・台南に各1泊という旅程で、北京・台湾は第3日目に北大附中・台中一中と、韓国は第4日目に安養外国語学校とそれぞれ学校間交流を行ない、親交を深めることができた。特に課題探究で事前準備を十分に行なえたことが例年以上に交流が盛り上がった要因の一つといえよう。パスポートを自宅や現地バスに置き忘れる騒動はあったものの、全体に大きなトラブルは無く無事に過ごすことができた。これらにより、生徒アンケートでも総合的な印象として「とてもよかった」、「どちらかといえばよかった」を合算した評価が北京89%、韓国86%、台湾91%という高評価につながったと思われる。

b. 海外からの訪問交流

1) 授業内での交流

5月26日（金）に、国際教養学部のAIMS7 プログラム参加者で、春学期に早大で学んでいるASEAN 諸国7大学の学生12名が大学本部職員2名と共に「本庄でのフィールドワーク」の一環として来校した。学生たちは第3学年選択科目「英語ディスカッション（上級）」（受講生16名）の授業に参加し、大変活発な討論の時間を持った。午後は第1・2学年の通常授業を見学し、第1学年の英語の授業で

は来校しての印象を語る時間をもった。11月17日（金）に、早稲田大学 I C C の支援による公募に応じた 3 名の留学生が第 3 学年選択科目「英語ディスカッション（上級）」の公開授業に参加した。授業では学院生の発表に対するコメントと発表後のディスカッションに参加した。午後の授業見学の後、『附属校サミット』の生徒発表の部で実施されたポスターセッションに参加し、ポスター発表を行なった生徒約 40 人に対して研究内容について質疑を行なった。

2) 台中市立台中第一高級中等学校との交流

5 月 23 日（火）に台湾の台中市立台中第一高級中等学校の生徒 56 名が来校した。同中学には本学院の修学旅行団が毎年訪問し交流している。今回の交流は、稲稜ホールでの歓迎式でバディマッチングを行ない、和やかな雰囲気での交流が始まった。その後物理実験教室に参加し、さらにその後には 3 グループに分かれてみそ汁を作ったり、折り紙を折ったり、キャンパスツアーに出かけたりした。また教員同士の昼食交流も行なわれ、そこでは茶道部がお点前を披露した。最後は写真撮影が行なわれ、大変充実した交流となった。

c. 留学

17 年度は新たに留学期間を含めて 3 年で卒業することができる「第 2 種留学」の内規を定め、プログラムを実施した。これは多様な異文化体験を通して複眼的思考を養い、帰国後、日常生活及び学校生活においてより一層の活躍を期待することを求めんがためである。17 年度は 3 名の生徒が第 2 種留学の留学生として認められて留学した。また 1 名が従来の留学制度の留学生（「第 1 種留学」と称することになった）として留学した。

d. 海外研修プログラム

17 年度初めての試みとして、グローバル人材の育成を目的にする「エンパワーメントプログラム」と「アメリカ研修プログラム」を実施した。いずれも I S A という業者が実施運営する有料のプログラムで、S G H 事業終了後を見据えてのプログラムである。

「エンパワーメントプログラム」は、多様な視点でグローバル社会に貢献する若者たちの育成を目的に考案されたプログラムで、ディスカッションやプレゼンテーションをすべて英語で行なうものである。12 月 15 日（金）～17 日（日）の 3 日間、4 人の外部講師を招いて、第 1 学年 12 名、第 2 学年 4 名の計 16 名が参加した。3 日間とも終日英語だけを用いるプログラムのため最初は苦勞したが、非常に有意義であったという感想が届いている。2 月末に卒業式直前の第 3 学年を対象に同じ企画を立ち上げ案内したが、応募が僅か 1 名であるため実施することはできなかった。実施の時期、広報の仕方に課題がある。

「アメリカ研修プログラム」は、18 年 3 月 18 日（日）～28 日（水）日程で行なわれた、語学研修やシカゴ大学・ハーバード大学ビジネススクールなどの見学、シカゴの高校生との交流など盛りだくさんのプログラムである。第 1 学年 22 名、第 2 学年 5 名の計 27 名は現地で様々な経験ができたようである。中でもアメリカの大学や大学院に在籍している日本人学生の講話やディスカッションは過去の自分を振り返り、将来の自分を展望するために極めて有益であったと報告している。また、自分

たちの得た経験を参加しなかった同輩や後輩に伝え、18年度はさらに充実したプログラムにしたいと極めて意欲的であった。このプログラムの継続が望まれる。

⑤科学関連プログラム

本学院は02年にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）制度開始とともにその指定を受け、以後、05年に再指定、10年に再再指定され、全国のSSH校の中で最古参である。15年度、16年度は経過措置校として活動を継続した。17年度についてはSSH指定を受けなかったため、これまでのSSHの取り組みを整理し、一部継続した。

1）河川調査プロジェクトおよび本庄市立藤田小学校との連携活動

本学院は09年度より、大学院創造理工学研究科社会環境工学科研究室・本庄市・地元NPO法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内2河川の環境調査活動を実施している。17年度も藤田小学校との連携で春に実施した。

2）藤田小学校の年間講師

12年度より、本庄市立藤田小学校第5・6学年の年間総合学習の講師を本学院生徒がつとめている。内容は、環境問題へ問題意識を高める事、科学への興味関心を高める事、プレゼンテーションスキル向上を中心としている。17年度は計10回の授業を行なった。

3）親子科学教室

SSH事業成果の地域還元を目的とし、毎年夏冬の2回（出張授業を含む）、本学院実験室で親子科学教室を開催している。17年度は7月28日（金）、12月26日（火）に親子科学教室を行なった。

4）特別講義「これがサイエンスだ！」

本学院教員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、17年度は次のように4回実施した。

第1回：6月5日（月）「グラフ理論から考える一筆書き可能条件とその応用」
窪田凌氏

第2回：6月12日（月）「大地の呼吸～本庄に眠る小さな巨人～」小山悠太氏

第3回：9月26日（火）「統計の力でウソを見破る」岩崎良氏

第4回：10月31日（火）「『重力の波を見る』～ノーベル物理学賞2017解説～」
峰真如氏

5）Singapore National Junior College（NJC）との交流活動

7月15日（土）～7月23日（日）に生徒9名をシンガポールに派遣し、校内外における様々なプログラムを実施した。交流の軸は共同研究であり、3つのテーマについて実験・ディスカッションを行なった。11月7日（火）～14日（火）にはNJCからの生徒・教員13名を本学院に受け入れ、各種博物館におけるワークショップ、授業交流、実験教室、河川調査などの科学教育プログラムを行なうとともに、歓迎お茶会等の文化交流を行なった。世界の水問題をテーマとしたミニシンポジウムを行なった。本プログラムはJTSのさくらサイエンス事業の補助を受けている。

6) 「これがサイエンスだ！」ゼミ合宿

7月20日（木）から22日（土）までの2泊3日で、本庄セミナーハウスに宿泊しながら、理科・数学の課題に取り組む「これがサイエンスだ！ゼミ合宿」を実施した。

7) 国立天文台（三鷹キャンパス）の見学

8月23日（水）に東京都三鷹市にある国立天文台（三鷹キャンパス）を訪れ、望遠鏡・4D2U（プラネタリウム）・ARMA（電波望遠鏡）受信機の開発施設・TAMA 300（重力波干渉計）等の見学をした。また研究員の方からそれらの原理の説明を受けた。

8) 小笠原研修

この研修は06年に開始し、17年度で11回目を数える（途中1回台風のため中止）。今年は8月26日（土）～30日（水）の日程で実施した。当初は、オガサワラグワを中心とした母島の希少植物観察を中心とした研修であったが、お世話になっている母島への還元を考え、11年から母島子供科学教室を開催している。当初は参加人数も少なく3人の年もあったが、地域に認識されてきたのか、年々参加者が増えている。会を重ねるごとに、母島観光協会との連携が深まり、密度の高い研修活動に近づいていると言える。今年度は特に、母島に於いて観光協会並びに環境庁のご協力を得、小笠原の自然環境に関する3つの密度の高いワークショップを実施することが出来た。残念ながら台風の影響で、後半の父島におけるプログラムを断念し、1日早く帰らざるを得なかった。

9) いい川・いい川作りワークショップ2017

9月9日（金）～11日（日）に福岡大学で行なわれたワークショップにおいて、「本庄市内河川における外来エビの汚染状況とその理由」の研究により、2次選考7本のなかに残り、優秀賞を受賞した。本ワークショップは、日本中の河川環境保護に取り組む団体が、その活動を発表し評価し合う全国大会である。

10) Japan Super Science Fair (J S S F) 2017

10月31日（月）～11月5日（土）に立命館高等学校が主催した大規模な国際高校生科学フェアJ S S Fに生徒3名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行なった。うち1名はN J Cとの共同研究発表を行なった。本学院は立命館高校重点枠S S H人材育成事業の連携校であり、2名の生徒はJ S S Fに先立ち、2回の国内研修及び7月26日（水）～31日（月）台湾高雄市および台北市で実施された、高雄高級中学・高級女子中学との共同研究に参加している。本学院の2名の生徒と高雄高女の2名の生徒による「バナナを美味しく食べるには」の研究成果は、3本の優秀研究のうちの1本に選ばれた。

11) 稲門J r. 参加

11月19日（日）に早稲田大学高等学院で行なわれた「稲門J r.」に参加し、2件の研究発表「宇宙線ミューオンの雷雲からの影響」「芝草原における炭素収集の比較、森林生態系における炭素貯蔵量」を行なった。

12) Satit Prasarnmit Demonstration School (S P D S) との交流

12月16日（土）～21日（木）の日程で、タイのSatit Prasarnmit Demonstration

School(S P D S)が本学院を訪問した。J S Tのさくらサイエンス事業の一環とである。同校はバンコクにあるSrinakharinwirot Universityの附属高校である。Demonstration Schoolとは、タイで大学の教育学部に附属し、カリキュラム開発や教材研究、教師育成を目的とする学校のことを指す。博物館・企業見学・早稲田大学見学・文化交流の他、タイと日本共通の伝統文化の再認識、継承と発展に寄与することを考え、「絹の伝統技術の継承発展」についてミニシンポジウムを実施した。

13) Mahidol Science Fair 2018 (T I S F) およびMahidol Wittayanusorn School (MWITS) との交流活動

1月25日(木)～1月31日(水)に生徒8名がMWITSを訪問し、科学交流・授業交流・文化交流を行なった。その間、26日～27日に開催された、科学フェアに参加して研究発表を行ない、物理部門でBest Idea 賞を受賞した。

14) 川の日ワークショップ関東大会

3月17日に筑波大学で開催された大会において「小山川における小型河川エビの状況」というタイトルの研究発表を行ない、特別賞を受賞した。このシンポジウムは、関東における河川環境保護に携わる小学生から大人までが幅広く、その活動を報告し評価を得るものである。

15) 本庄市民シンポジウム「川のシンポジウム2017」

3月10日(土)に早稲田リサーチパークにおいて、本学院と藤田小学校の主催で開催した。「小山川における外来エビ・在来エビの状況とその理由」「小山川におけるオスメスの分布とその理由」というテーマで河川研究班が研究成果を発表した。高校と小学校が市民に向け、河川環境について啓蒙するシンポジウムを開催するという事は全国的にも極めて稀な例である。

⑥ S G H (スーパーグローバルハイスクール)

a. 研究開発の概要

「国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム」を大目標として2015年度に指定を受け実施3年目にあたる17年度は、各研究課題における探究型プロジェクトが順調に発展し、授業における教科間連携と生徒運営委員の活動がさらに活発化した。第1学年から第3学年までの約80名となる各プロジェクトの生徒リーダーの間では、本学院のS G Hが世界のどの場所でもパートナーシップ構築で求められる「企画力・発想力」、「知力・判断力」、「共感力」、「コミュニケーション力」、「行動力」の涵養が目的であることが十分に共有され、より多くの生徒に活動の機会を広げるべく自発的な運営がなされている。教科横断型授業や「総合的学習の時間」「学年集会」を使った展開、さらに今年度会場校を務めた「附属校サミット」の場でのS G H成果報告などを通じ、ほぼ全員の教職員が何らかの形でS G H活動に関わった。

17年度から第3学年の全員を対象にした卒業論文一斉指導および卒業論文評価基準の統一を導入した。国内外12ヶ所での夏季フィールドワークを核とした各研究課題では、年度当初から各研究課題の成果報告・公開の機会を10月、11月、1月に設けることを示し、異

なる形式（口頭発表・ポスター発表・論文）で成果について段階を追ってまとめることで学習深化の推進をはかった。全校ぐるみ、学年ぐるみのSGH企画参加を可能にすべく、学校行事および授業計画を検討し、17年度に開催する国際高校生学会（以下、WaISEC）の11月中旬の実施の承認を受けて準備をスタートした。生徒たちによるSGH事業運営委員会（以下、シニアスタッフ）活動は昨年よりさらに活発化しWaISECに向けた準備が始動している。英語では全学年に習熟度別授業を導入し、「多文化共生」を基調理念とした教科横断型の授業内容を展開した。

b. SGH研究課題の授業内での展開

1) 第3学年「総合的学習の時間」での卒業論文製作一斉指導

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター内ライティングセンターと連携し、3回の第3学年に対する講習会を実施した。

2) 第1・2学年英語授業内でのSGH課題の展開

第1・2学年の英語習熟度別授業では、「家庭基礎」の2学期の指導内容である「食と生活・社会」の内容を踏まえたプレゼンテーションの授業（第1学年）、およびグローバルな問題について発表と意見交換（第2学年）の授業を展開。授業案と生徒の成果物を次年度の教材にする基盤を整えた。

3) 第2学年および第3学年選択科目授業内でのSGH課題の展開

研究課題の1つ『「世界文化遺産」紡績業を軸にした教科横断型授業の開発』の成果を踏まえ、第2学年世界史Bおよび第3学年古典Bで中国と日本の近現代の深いかかわりについて授業を展開した。また第3学年「政治・経済」の複数の講座で国内外の政策と国際関係の諸課題について、アクティブラーニングの手法も取り入れながら授業を展開した。

c. 各研究課題における国内外生徒派遣と成果の普及

16年度に引き続き、夏期の国内外フィールドワークを核とした課題探究を展開した。SGHの夏季フィールドワーク（以下FW）への参加は1人1か所という条件を提示した上で全校生徒を対象に公募し、コーディネーター教員が研究課題の趣旨に応じた選考方法で参加者を決定した。国内外FW・シンポジウム参加は61名（うち海外派遣は46名）となった。

1) 沖縄FW（研究課題A-1「グローバル社会と人権」教材開発）

沖縄で基地と人権をテーマにした現地調査を実施（8月29日～9月1日、生徒2名、引率教員1名）。戦争史跡、米軍基地周辺訪問、戦争の「語り部」の方との対話を行った。

2) 上海・蘇州FW（研究課題A-3「世界文化遺産」紡績業を軸にした教科横断型授業の開発）

過去2か年の研究成果および事前学習会に基づき、上海でのフィールドワークに加えて蘇州中学で2校合同学習会実施（7月25日～30日、生徒7名、引率教員2名）。卒業論文のテーマとして研究を継続する生徒もいる。

3) シンガポールFW（研究課題B-1インバウンド観光プランの考案・実行と相互評

価)

第2学年英語授業でオープン型課題探求を経験させ、大学講師（観光学）による事前学習と研究手法の指導を行なったうえで、シンガポールおよび日本の観光地での現地調査、現地の交流高校生徒とのディスカッションを実施（8月22日～25日、生徒5名、引率教員1名）。研究成果は「SGH甲子園」（ポスターセッション）と早稲田大学情報教育研究所主催「教育の国際化研究会」（英語による口頭発表）で発表した。

4) World Youth Meeting 参加とジョグジャカルタ研修（研究課題B－3相互訪問とオンライン交流で進める発信型プロジェクトの開発）

インドネシアの公立高校SMA N2 Yogyakarta の生徒2名・教員1名が、World Youth Meeting に共同参加のための来日（7月30日～8月7日）、アクティブラーニングをテーマにした協働発表に取り組んだ。8月下旬には「食と伝統文化」をテーマにしたフィールドワークを実施（8月27日～9月1日、生徒5名、引率教員2名）。ジョグジャカルタの交流校訪問時には「フリーペーパー」の編集会議を行い、雑誌制作に通年で取り組むプロジェクト交流（本学院生徒9名、交流校生徒4名参加）を継続。

5) 韓国FW（研究課題C－1中国、韓国、台湾の高校とのテーマ学習型交流の開発）

日韓関係の歴史、およびSDGsについての事前学習を踏まえて安養外国語高校への歩訪問交流を実施（8月8日～11日、生徒15名、引率教員2名）。「格差」「ジェンダー」「環境」「日韓関係」について英語と日本語での討論を3日間かけて行った。

6) ネパールFW（研究課題C－2国際共生学を踏まえたボランティアの充実）

貧困と人身売買被害者救済に取り組む団体「ラリグラス・ジャパン」の指導と支援のもとに、同団体によるネパールでのスタディーツアーに参加（8月4日～15日、生徒7名、引率教員2名）。本庄市の「六高祭」で広報活動（8月）および稲稜祭での支援バザー（10月）を実施した。

7) 屋久島FW（研究課題C－2国際共生学を踏まえたボランティアの充実）

自然環境に関する事前学習を踏まえて屋久島での清掃ボランティア活動を体験（8月28日～30日、生徒10名、引率教員1名）。経済活動、環境保護と国際共生についての考察の成果発表を行なった。

8) 韓国ハナ高校主催の国際シンポジウム参加（研究課題C－3 WaISEC (Waseda International Symposium on Education and Culture) 実施）

7月17日～22日に生徒7名・教員2名が参加。メディアと社会を題材とした英語での研究発表とディスカッションのスキル向上を体験。国際学会の事例を学んだ参加者が1月に研究発表会を2回行ない、在校生との学習成果の共有と次年度の参加奨励に努めた。

d. 研究支援と成果の普及

「第22回附属校サミット」（11月17日～18日）に、生徒による学習成果報告としてSGHシニアスタッフリーダー2名が口頭発表、夏期フィールドワーク参加者の全員がポスター発表を行なった。ポスター制作指導のために、情報科教員による講習会「研究発表ポスター制作のABC」（9月25日、生徒35名参加）、および「ポスターセッションリハーサ

ル」(11月7日、生徒20名・教員5名参加)を開催した。また、SGH成果報告会を第1学年全員に出席を義務付けて実施した(1月31日)。WaISEC参加の下地を醸成すると同時にポスターセッションの見学を推進した。

e. 英語授業について

第1学年「英語表現Ⅰ」と第2学年「コミュニケーション英語Ⅱ」で各1単位、および第3学年「英語表現Ⅱ」でStandardとAdvancedのクラス2分割授業を通年で実施した。また第3学年全員を対象に習熟度別授業の評価をアンケート方式で実施した。全校生を対象に、9月にTOEFL(第3学年全員、第1・2学年の上級レベル生徒)またはTOEFL Jr(第1・2学年の標準レベル生徒)の受験を義務付けた。スタンフォード大学提供による遠隔授業”Stanford e-Japan”に継続して参加した。同大学の応募エッセイ選考を経て、春学期は第1・2学年3名、秋学期は第3学年1名が受講した。参加推進のため、学習成果発表会を開いた。

⑦高大一貫教育

a. 学部説明会

第2学年を対象とする学部説明会は、5月27日(土)と10月20日(金)の2度にわたって実施された。

5月の説明会は、例年と同様に午前の部と午後の部に分けて行なった。午前の部は、早稲田キャンパスにて午前9時より開始し、社会科学部、政治経済学部、法学部、国際教養学部の順で、各学部の教員によって30分ずつの説明がなされた。午後は、文系選択者と理系選択者とに分かれ、文系選択者は戸山キャンパスに赴き、文学部と文化構想学部について文学学術院の教員による説明を受けた。理系選択者は西早稲田キャンパスに足を運び、基幹理工学部、先進理工学部、創造理工学部に在籍する本校卒業生から、それぞれの学部の概要や学生生活の様子などについて説明を受けた。

10月の説明会は、本学院の稲稜ホールにおいて実施された。午前10時50分より開始し、人間科学部、スポーツ科学部、教育学部、商学部の順で、各学部の教員(ただし、教育学部に関しては、大学院教職研究科の客員教授を兼務する吉田茂学院長が担当)が説明を行なった。ただ、各学部割り当てられた20分という時間は、いかにも短すぎて、いずれの学部も制限時間内に終えることができなかった。せめて5月の学部説明会なみに、30分程度の時間が必要だったのではないと思われる。

第2学年の時点で進学学部を見定めている生徒はまれである。来年度に具体的な選択を迫られていることを理解し、自身の将来に思いを致すには、学部説明会は格好の機会となる。現に、学部説明会を機に、進学学部について思いをめぐらす生徒も数多く見受けられるようになった。

人間科学部とスポーツ科学部は、主として所沢キャンパスで授業を展開している。両学部の説明会も、元来であれば所沢キャンパスにおいて実施されるのが望ましいところであろう。日頃なかなか訪れることのない所沢キャンパスに足を運ぶ絶好の機会にもなりうる。いかにして両学部の説明会を所沢キャンパスで実現できるのか、

一考を要するのではなかろうか。

b. 理工学部説明会

6月10日（土）の13時30分～17時25分に西早稲田キャンパスにおいて理工3学部による「附属・系属校生徒のための進学説明会」説明会が行なわれたが、本学院としては第2学年理系進学希望者を対象とした。生徒は教室を移動しながら、自身の興味のある学部・学科の話聞いた。また、例年午前中には本学院独自の取り組みとして、希望者に対して、理工3学部のいくつかの研究室を訪問する、ということを行なっている。今年度は、電気・情報生命工学科、教育学部理学科（生物学専修）からの協力を得た。生徒たちは、研究の現場を垣間見ることができ、今後の進路の参考とすることができた様子であった。

c. サマーセミナー

夏休み開始直後の7月18日（火）・19日（水）に開催した。17年度は初日10講義、2日目6講義を設定し、計16名の学部教員を招いて、専門分野に関する講義を行なった。学部進学を考える上でおおいに参考になるものであったが、参加者の総数は16年度に比べて大幅に減少しており、15年度に比べるとさらに深刻な減少であった。主にクラブ活動の合宿や試合、コンクール等の日程が重なるためであるが、生徒の参加率を上げるための改善する必要がある。学部進学におけるミスマッチをできるだけ避けるために、今後も発展させていくべきプログラムである。

d. 学部開放科目

本学院は、大学キャンパスへの移動時間の関係で学部開放科目の生徒の受講は、水曜日と土曜日の午後が中心となる。17年度は春学期、秋学期ともに若干名の受講があった。履修者を増やすための方策を考えることが肝要であると思われる。

⑧生徒指導

本学院は、入学定員 320名という比較的小規模な学校であることのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導を心がけている。17年度は、16年度に引き続き以下の3点を重点目標として指導を行なった。

第1は「本学院のよき伝統である自由な校風を維持していこう」ということ。自由を享受するためには、それ相応の自覚・良識に裏打ちされた規律が必要である。校則の少ない自由な校風を維持していくためには、各自が本学院生としての自覚を持つことが求められている。

第2は「尊厳ある一人の人間として、志や気概を持って行動しよう」ということ。多様なタイプの人が集う本学院において、互いに切磋琢磨していけるように目標を高く据え、学識や徳行を深めていく。学識や徳行が深まれば深まるほど、その人柄や態度が謙虚になる。

第3は「他者を思いやり、仲間を大事にしよう」ということ。いじめや中傷といった他者を傷つけることはあってはならない。他者に対して謙虚であれば、思いやりの気持ちも生じる。他者へ自らの思いを遣わす「思いやり」の気持ちが、学院全体のマナー向上にもつながっていく。校則が少ない本学院であっても、各人が思い

やりをもって行動すれば、問題は生じないはずである。集会などで、こうした心構えを生徒に説き、しっかりと実践するように促した。

上記の方針を実現するための具体的方策として、年間を通じてLHRで生徒へ継続的な指導を行なった。また、課外講義として学外の有識者や専門家による様々な講演を行ない、生徒への啓発を促した。さらに今年度は「スマホ機器の扱い」についてWebを活用したオンデマンドコンテンツを作成し実践した。

教員組織としては、特に組主任は学年集団としてのまとまりを一層強固なものにすべく、学年集会等を通じて学年ごとに必要な生徒への指導を行なった。学院生としての自覚を持つよう繰り返し指導を行なうとともに、教員は生徒をより確実に把握するための取り組みを一層強化する必要がある。

Ⅲ．生徒

①生徒受入

a．入学試験全般

志願者総数は 2,883名で、前年比 187名増であった。東京都・埼玉県からの志願者が増加した。入学者数は 334名で、内訳は男子 183名（前年度比 7 名減）、女子 151名（同 5 名増）である。出身地（最終在籍中学校の所在地）別の入学者数は次の表の通りである。

埼玉	東京	群馬	神奈川	千葉	他道府県	海外
151	80	19	20	18	5	41

入試広報として、本学院での説明会を 3 日 6 回（7 月・9 月・11 月）実施したが、全ての回で全体会は予約満員となった。その他、早大附属・系属 7 校合同説明会（7 月 2 日（日））、海外 3 コース（14 都市）の学校説明会・相談会、出版社・学習塾等主催の説明会（25 会場 28 日）に参加した。受験生・保護者等との個別相談数は 1,373 件で、前年度比で約 100 件の増加となった。

学校見学・案内は、海外在住者に限定して入試期間・土日祝日・学校行事日を除いて随時行なった。17 年度の見学・案内は 188 件で、増加が続いている。

b．入学試験

全入試区分を通じて特段のトラブルや混乱もなく実施した。一般入試・帰国生入試の 2 次試験日が前年度に続き神奈川県立高校、千葉県立高校の入学試験日と重複したが、日時振替で対応した。全ての入試区分で男女を合わせた志願者数が増加した。一般入試・帰国生入試の 1 次試験は、例年通り早稲田・本庄の 2 会場で実施した。入試区分別の入学者数は、次の表の通りである。

	男子	女子	合計
一般入試	83	60	143
帰国生入試	18	11	29
α 選抜	49	38	87
I 選抜	18	13	31
合計	168	122	290

c．指定校推薦

指定校推薦による入学者数は次の表の通りである。一般指定校の被推薦率が上昇した。

	男子	女子	合計
一般指定校	6	21	27
地元指定校	9	8	17
合計	15	29	44

d. 入学決定者の集い

18年度入試後の入学決定者の集い参加者数は男子 169名、女子 150名、合計 319名で昨年度を上回った。「集い」後のアンケートによると、本学院のカリキュラムや特徴、特に英語、数学、国語の授業等について入学までにどのような準備をしたらよいかがよく理解できた、入学後の不安が和らいだ、入学後の学校生活が楽しみになった等、概ね肯定的に捉えられているように思われる。

②生徒への配慮

a. 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年2回行ない、学外奨学金の案内も含め、LHRや本学院のホームページを通じて生徒へ広く周知している。奨学金のうち学内奨学金を受給している生徒は、春季募集14名、秋季募集17名の合計31名であった。いわゆる「家計点」が高い、すなわち経済的に困窮度の高い家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金の状況は次の表の通りである。受給者の合計は28名であり、学内奨学金と同様、経済的に厳しい状況が反映されている。

奨学金名奨学生数

奨学金名		奨学生数
日本学生支援機構奨学金（学部進学後の至急予約）		12
地方公共団体奨学金	埼玉県	7
	東京都	2
	東松山市	1
	福島県	2
民間団体奨学金		4
合計		28

また、埼玉県授業料等軽減補助金は100名、埼玉県在住者を対象にした奨学のための給付金等を受けている者は13名であった。さらに国の制度である就学支援金受給者は第1学年194名、第2学年188名、第3学年174名で、合計556名となっている。

b. 保健室

保健室は学校保健計画に基づいて運営された。

1) 保健教育

各学年に健康教育講演を実施した（「課外講義」参照）。

17年度は競技スポーツガイダンスと連携し、運動部員へ学院の救急体制について

周知することができた。また、運動部員対象の救急法講習会を実施し、100名を超える生徒が救命入門コースを受講することができた。例年、教職員対象の救急法講習会も実施しているが、より多くの参加が見込めるよう、実施時期を検討したい。

2) 保健管理

4月20日（木）に生徒定期健康診断を実施し、全生徒（留学中の者を除く）が受診した。例年と変わらず、視力検査で17%、歯科検診25.7%の者が要受診となっており、他の項目と比較して疾病・異常被患率が高い。日常生活の安全のため、また学業への支障とならないよう、治療、矯正等を促したい。また、医師による健康相談（眼科・耳鼻咽喉科・歯科・整形外科）を実施し、生徒、教職員の健康問題をサポートした。

17年度は16年度と同様に、インフルエンザが大きな流行となり、140名の生徒（概ね第1・2学年）が罹患した。寮生の発症者数も多く、寮内での感染が疑われた。寮内の集団感染対策が課題である。今後も、適切な時期に適切な方法で正しい情報提供に努め、感染拡大を防止したい。

c. カウンセリング

授業期間は毎週水曜日と土曜日の午後に、大学学生相談室のカウンセラー（臨床心理士）による相談を実施した。発達障害が疑われる生徒の相談は近年増加傾向で、大学の障がい学生支援室と連携して生徒の支援にあたり、学部へと引き継いでいく必要がある。

d. 交通安全

4月11日（水）に、第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全講話」を実施した。本庄警察署員による講話で、主に自転車の安全走行と登下校中の防犯に関する内容であった。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなりうることを具体例で示す内容で、生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。

e. 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額 5,000円を徴収している。15年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。過去3年度分の支給実績は次の下表の通りである。

年 次	2015	2016	2017
支給人数（延べ）	608	770	791
支給人数（実数）	230	270	254
支給上限額（10万円）到達者数	8	11	6
支給金額（円）	3,102,798	4,350,717	4,146,464

f. 学校安全管理

キャンパスが本庄市と児玉町にまたがる浅見丘陵に位置し、その全域が大久保山遺跡であること、さらに自然保護問題の事情もあり、校門や塀がない。そうした都市部の学園とは大きく異なる環境の中で生徒の安全確保に取り組むため、教員日直制を設けている。日直教員は、下校時刻の遵守のために生徒に帰宅指導をするだけでなく、校地巡回により不審者進入の未然防止に努めている。

現実的で科学的な安全管理推進に向け、キャンパス管理室（運営は外部委託）を設置し、キャンパス内のセキュリティを強化している。警備員日中6名、夜間は4名による巡回・点検などマンパワー主体の業務に加え、最新テクノロジーを活用した防災・防犯・監視・入退出機器の設置により、24時間監視体制と緊急時の出動体制を維持している。校舎内のセキュリティ機能は高いが、広大なキャンパスに点在する諸施設のセキュリティレベルをさらに向上させることが今後の課題である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第19条第1項に規定される安全衛生委員会が設置され、本庄プロジェクト推進室長を委員長に、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

14年2月に埼玉県本庄警察署との相互連携に関する協定書を締結した。公立校と比較し地元の情報が入りにくい私立学校の特質上、警察と連携を図ることは、生徒の健全育成に資するだけでなく、地域との情報ネットワークを構築し、安全体制を強化するうえでも大きな意義があると考ええる。

東日本大震災の教訓を踏まえ、地元消防署と協力し、大地震発生を想定した防災訓練を11月17日に実施し、生徒の防災意識の高揚を図った。また生活の様々な場面で生徒が携帯電話等の情報機器を利用する機会が増加する中、違法・有害サイトへのアクセスによる犯罪に巻き込まれないよう、外部から講師を招いて情報教育セミナーを行なった。

③生徒進路

a. 進学学部

17年度は 339名が早稲田大学各学部へ進学した。各学部・学科・専攻・専修（基幹理工学部は学系）ごとの男女別の進学者数は次の表の通りである。

学 部	学 科	専 攻	専 修	進学者数		
				計	男子	女子
政治経済学部	政治学科			30	10	20
	経済学科			35	21	14
	国際政治経済学科			12	6	6
法学部				47	31	16
文化構想学部	文化構想学科			16	10	6
文学部	文学科			20	7	13
教育学部	教育学科	教育学専攻	教育学専修	2	2	0
			生涯教育学専修	1	0	1
			教育心理学専修	2	0	2

	初等教育学専攻	1	0	1
	国語国文学科	3	1	2
	英語英文学科	1	1	0
	社会科	1	1	0
	地理歴史専修	1	1	0
	公共市民学専修	1	1	0
	理学科	1	0	1
	生物学専修	0	0	0
	地球科学専修	0	0	0
	数学科	3	3	0
	複合文化学科	4	4	0
商学部		34	27	7
基幹理工学部	Mathematical Sciences	0	0	0
	学系Ⅰ	4	4	0
	学系Ⅱ	18	17	1
	学系Ⅲ	15	11	4
	Computer Science and Communications Engineering	0	0	0
創造理工学部	建築学科	8	4	4
	総合機械工学科	5	5	0
	Mechanical Engineering	0	0	0
	経営システム工学科	7	5	2
	社会環境工学科	4	3	1
	環境資源工学科	2	2	0
	Civil and Environmental Engineering	1	1	0
先進理工学部	物理学科	2	2	0
	応用物理学科	0	0	0
	Physics	0	0	0
	化学・生命化学科	3	1	2
	応用化学科	2	0	2
	Chemistry	0	0	0
	生命医科学科	3	1	2
	電気・情報生命工学科	13	10	3
	Bioscience	0	0	0
社会科学部	社会科学科	20	14	6
人間科学部	人間環境科学科	0	0	0
	健康福祉学科	0	0	0
	人間情報科学科	2	2	0
スポーツ科学部	スポーツ科学科	6	6	0
国際教養学部	国際教養学科	10	7	3
合計		339	220	119

b. 他大学進学

17年度卒業決定者のうち、早稲田大学推薦辞退者は1名だった。

IV. 研究活動

①教員の研究成果

a. 論文

- 「学校事故の国家賠償と「重過失」がある教師個人への求償」
『季刊教育法』193 17年6月
- 「魏晋時代の壁画」
『魏晋南北朝史のいま』（『アジア遊学』213） 17年8月
- 「高校数学における「深い学び」を促す授業実践－微分公式の証明を題材とした
「命題間のつながり」を意識させる活動－」 17年9月
『数学教育学会誌』58－1・2
- ※「数学教育学会馬場奨励賞優秀論文賞」受賞
- 「学会専門部会企画としての高大連携による協働型探究学習の実践[報告]」
（共著）
『グローバル人材育成教育研究』1－4 17年9月
- 「アクティブ・ラーニングの手法を用いた国際理解教育－地域の特色を生かした
インバウンド観光プランの創造を通して－」
『日本私学教育研究所紀要』53 17年12月
- 「国際バカロレア・ディプロマプログラム「言語B」の教育手法を参考とした授業
を受けた学習者の意識（一般の高等学校でのモデル構築に向けて）」
『国際バカロレア教育研究』創刊号 17年12月
- 「Discourse Analysis and Electronic Flashcard Software: Using Films and
TV Dramas on DVD as Learning Materials and Anki as an Individual Study
Tool」
『映画英語教育研究』22 18年3月
- 「反転授業の事前学習に関する一考察と高校数学への実践」
『早稲田教育評論』32－1 18年3月
- 「国際バカロレアの外国語科目「Language B」における評価活動と学習内容」
『グローバル人材育成教育研究』 18年3月
- 「A New Module Based on PARSEL Stages - For PET bottles, is recycling
all we need to do? -」
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』36 18年3月
- 「源頼実集注積稿 上」（共著）
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』36 18年3月
- 「高校数学における「事例収集型ジグソー法」（ECJ法）－数学学習における
学習過程モデルを理論的裏付けとしたジグソー法の一提案－」
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』36 18年3月
- 「新学習指導要領とアクティブ・ラーニングスーパーグローバルハイスクールの
実践を中心に－」
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』36 18年3月

b. 口頭発表

- 「일본에서의 차기 학습지도요령개정과 액티브 러닝 (日本における次期学習指導要領改訂とアクティブ・ラーニング)」
제117차 한국일본교육학회 춘계학술대회 (第117回韓国日本教育学会春季學術大会) 17年 5月
- 「国際バカロレア (IB) の概要と教員養成」
文教大学国際学部Faculty Development 17年 5月
- 「国際バカロレアの外国語科目の評価手法、試験内容から捉える能力感」
グローバル人材育成教育学会第4回関東支部大会 17年 6月
- 「PARSEL - European New Teaching Material for Chemistry」
Network of InterAsian Chemistry Educators 17年 7月
- 「한일의 미래와 ESD (日韓の未来とESD)」
世界市民教育研究会 17年 7月
- 「英語による授業を可能とする教員の英語力・学生生徒の英語力」 (共同)
日本ビジネスコミュニケーション学会2017年度年次大会 17年 7月
- 「国際バカロレア「Language B(English)」評価・学習から捉える高校英語教育：高大接続に向けて」
日本ビジネスコミュニケーション学会2017年度年次大会 17年 7月
- 「IB教育実践部門講演」
国際バカロレア教育シンポジウムIB導入の課題と展望 17年 7月
- 「授業構成モデルに沿ったジグソー法の提案と実践ー高校数学での深い学びを促す活動(2)ー」
日本数学教育学会第99回全国算数・数学教育研究大会 17年 8月
- 「魏晋时期甘肃高台社会－民居為主的研究」
中国魏晋南北朝史学会第十二届く年会暨国際學術研討会 17年 8月
- 「話す力・書く力を鍛えるー国際バカロレア (IB) の教育手法を参考としてー」
英語授業研究学会 17年 8月
- 「The Effects of Approaches to Teaching and Learning on Students' Productive Skills in International Baccalaureate Language B (English)」
環太平洋応用言語学会 The 22nd PAAL Conference 17年 8月
- 「高校数学における「深い学び」を促す実践ー数式の意味理解を中心にー」
2017年度数学教育学会秋季例会 17年 9月
- 「「言語B (英語)」の教育手法を取り入れた授業とクリティカルシンキング育成との関連性」
日本国際バカロレア教育学会第2回大会 17年 9月
- 「国際バカロレア (IB) 型の英語教育で批判的思考 (CT) は育つのか。」
グローバル人材育成教育学会 17年 9月
- 「次期学習指導要領が中等教育と大学に与える影響ー国際バカロレア (IB) とイ

- 「イングランドのカリキュラムとの関連性」 (共同)
 グローバル人材育成教育学会第5回全国大会 17年9月
 「일본에서의 슈퍼 글로벌하이スクール과 액티브러닝 (日本におけるスーパーグローバルハイスクールとアクティブラーニング)」
 한국일본교육학회 제119차 학습발표회 (韓国日本教育学会第119次学術発表会) 17年10月
 「教育現場におけるコーチングー実践と研究の共鳴ー」
 アカデミック・コーチング学会第2回大会 17年10月
 「高校数学における深い学びを促す指導ー定理・公式の意味理解を軸としてー」
 日本数学教育学会第50回秋期研究大会 17年11月
 「生徒指導上の配慮とSNS指導教材の開発」
 全国私立大学附属・併設中学校・高等学校 教育研究集会 17年11月
 「国際バカロレア教育の普及に向けて」
 国際バカロレア教育普及に向けた公聴会 17年12月
 「高校数学において深い学びを促す学習過程モデルの意味づけ論を用いた一考察ー操作と例に着目してー」
 全国数学教育学会第47回研究発表会 18年1月
- c. その他
- 「『北野天神縁起』の教科書単元教材化について」
 『【シリーズ】日本文学の展望を拓く② 絵画・イメージの回廊』 17年11月
 「JR八高線からみた車窓景観」
 『月刊地理』62-12 17年12月
 「西藏自治区拉薩周辺の風景から考えた授業や研究の題材」
 『神奈川県高等学校教科研究会 社会科部会地理分科会 2017年度海外研修報告書』 17年12月
- 論文13本、口頭報告25件であったが、口頭報告が16年度よりも大幅に増加した。なお口頭報告のうち5件は国外でのものである。

②学内研究費による研究

a. 特定課題 (基礎助成)

- 「日・韓の発酵・醸造容器に関する比較考古学的研究」 192千円
 「墳墓画像による3～5世紀における中国西部地域の民族状況の研究」 165千円
 「日韓イコール・パートナーシップ構築のためのESDプログラムの研究」 160千円
 「高校数学における深い学びを促す学習活動の研究」 137千円

b. 特定課題 (B)

- 「日・韓の発酵・醸造容器に関する比較考古学的研究」 200千円
 「墳墓画像による3～5世紀における中国西部地域の民族状況の研究」 200千円
 「三波川変成岩のユニット境界に見られる変形構造の解析とその教材化」 200千円

「日韓イコール・パートナーシップ構築のためのE S Dプログラムの研究」

238千円

「高校数学における深い学びを促す学習活動の研究」

200千円

③特別研究期間

「韓国におけるE S Dと社会科教育」

「高校数学教育における構造指向の立場から見た学習モデルの研究」

④研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年1回刊行している。17年度は第36号を刊行し、論文6本を収録した。

V. 教育研究施設

①校舎整備計画

本学院Ⅲ期整備事業である体育館の新築工事は18年3月16日の大学評議員会で正式に承認され、3月29日に起工式を行なうことができた。これは現校舎の西側用地に敷地面積 63,077.60㎡、延床面積4,326.87㎡、地上3階の建物として建設される。工期は18年7月から20年2月までで、同年4月から利用できる予定である。この新体育館が完成すれば、東の稲稜ホールから新体育館までと東西に長い施設配置ではあるが、本学院の教育施設は一応の完成を見ることとなる。

②学内施設

a. 教室

教室は普通教室23、ゼミ室4、理科実験・講義室5、情報処理室2、美術室1、体育講義室2、地理演習室1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、CALL教室1、大教室1で構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

b. 稲稜ホール

15年度より稼働を始めた稲稜ホールは学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会、その他各種様々なイベント、音楽の授業やブラバンの活動、学外の機関の利用等を含め年間の施設利用回数は数十回を超える。本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしていると言える。

c. CALL教室

PC教室に隣接した46名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2名1組の机にはPC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会やワークショップにも活用されている。

d. コンピュータ・インターネット環境

95号館を使用するようになってから、PC室2室（46名対応）を中心に授業や課外活動を展開している。PC室は「情報」・選択科目以外に、情報環境を必要とす

る様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、生徒の創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室にLANの情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内3カ所に無線LANのポイントがあり、情報コンセントのない場所でもWiFiでノートPCやモバイル等のインターネットへの接続が可能である。このような環境のため、ノートPCやiPadを持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

e. 体育施設

1) 学院体育館

95号館からの距離が遠く、体育の授業をはじめ学期集会等、移動の際にやや時間がかかる。バスケットボールコート2面分の広さがあり、授業での使用頻度は非常に高い。また放課後クラブ活動でもバスケットボール部、バレーボール部、体操部、剣道部が交替制で使用している。

2) 共通教室棟体育館

バスケットボールコート1面の広さがあり、授業では主にバドミントン、卓球、ダンスを行っており、学院体育館同様使用頻度は非常に高い。放課後のクラブ活動では、卓球部、バドミントン部、剣道部が使用している。

3) サッカー場

サッカーコート1面を十分に確保できる広さであり、それを活かした授業展開ができています。授業や球技大会等行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは非常に良好である。

4) ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会、マラソン大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビー部が使用している。

5) 野球場

主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目授業を十分に展開できる広さである。マラソン大会ではスタート地点とし、クラブ活動では、硬式野球部が使用している。

6) テニスコート

テニスコート6面（クレイ4面・オムニ2面）は、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7) 部室棟

部室とトレーニングルーム、ミーティングルームがあり、多くの運動部が共用している。

8) 屋外私設全般

施設の整備、維持管理体制を体育科と各運動部で模索しながら、あくまで活動する生徒自身が主体的にその管理を進め始めている。

f. 図書室

16年度より運営に業務委託を導入したが、利用者へのサービスはほぼ今まで通り

行なっており、委託に伴う大きな混乱等はなかった。15年度に90-7号館へ移転したことに加え、16年度から開室時間を18時まで1時間延長したことにより、入室者数は着実に増加している(前年度比約50%増)。但し、図書室を頻繁に利用する生徒はまだ一部に限られていると思われるため、より多くの生徒に図書室を有効活用して貰えるよう、学内関係個所と協力しつつ所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

g. 保健室

敷地が広大であるため、保健室から学院体育館、共通教室棟、稲稜ホールまで距離があり、そこでの急な傷病への対応が遅れがちである。移動方法、搬送手段については課題が残る。ベッドは4床あるが、17年度は全部が埋まることも多かった。定期テストを保健室で受験する生徒も多いが、保健室の広いスペースが活用できている。

h. 食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている(運営は早稲田大学生協に委託)。生徒の食堂利用時間は、主に11時00分から11時20分までのコーヒースタンドと13時10分から13時50分までの昼休みである。食堂の座席数は442であり、ピーク時間帯に一時的な混雑は見られるものの、概ね問題はないと考えられる。そのほかの付帯設備として、自動販売機4台、給茶機3台、食券販売機4台が設置されている。食事時間帯以外は生徒の自習スペースやコミュニケーションの場として有効に活用され、また学校説明会(個別相談)や学年集会などさまざまな学校行事にも利用されている。

i. その他

早稲田大学は、芸術活動の発展を目指し「キャンパスがミュージアム」(芸術作品のキャンパス内展示により芸術作品と身近に触れ合える「場の創造」)を標榜しており、本学院も大学が収蔵する絵画や写真の公開を積極的に進めている。17年度は次の絵画4点、写真1点が展示された。

『ローズの森Foret de printemps』	嶋田しづ	95号館1階会議室
『いつもの散歩道A』	井上悟	95号館1階ワークショップエリア
『マンドリンのある卓上静物』	笠井誠一	95号館1階ワークショップエリア
『丘を巡る日』	藪野健	95号館2階交流ラウンジ
『本庄高等学院空撮2013.10.28』	中村孝之	95号館1階ワークショップエリア

③スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託して、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。今年度からバスに詰めて乗車することの徹底を行ない、バスの増便の数をおさえることができた。稲稜祭一週間前は準備のために始発バスに乗る生徒が増えるため増便を実施した。寄居駅発着のバスは複数路線から通学する生徒がいるため、来年度も引き続きダイヤの見直しを行なっていくべきである。

④早苗寮

男女共用が最終年度となる早苗寮の入居状況は、年度初めは、女子は満室、男子は2部屋の空きであった。新入生女子は希望者の3分の1しか入寮ができなかった。そのため、年度途中で留学等で女子棟に空きが出るとすぐに入寮者が決まる状況であった。一方男子は、海外在住の家族が帰国する件数が6件となり、途中での入寮者はいたものの、年度末には6部屋の空き部屋が出るようになった。

自治会行事は、春の新入生歓迎会、クリスマス国際交流会、ビンゴ大会、寮長寮母に感謝する会、早苗寮さようならパーティー、寮長寮母調理長に感謝する会と、業者の交代等の影響もあり、例年より多くの行事を行なった。

食事面では、早稲田大学プロパティーマネジメントともものに検討・改善し、夕食の喫食率は過去最高になった。しかし、朝食の喫食率は50%程度にとどまり、継続的な課題となっている。

女子専用の梓寮がオープンに伴い、女子生徒はそちらに移動したため、早苗寮は男子専用の寮となった。今後は、2つの寮の生徒が切磋琢磨する仕組みを作り、これまで以上に寮の魅力を高める方策を考えている必要があると思われる。

⑤生徒寮整備事業

女子生徒の入寮希望に対応するため、早苗寮とは別に、新しく女子専用の生徒寮－「梓寮」が18年3月7日に竣工した。これは約2508㎡の敷地に地上4階、鉄筋コンクリート壁式構造、延床面積3700㎡、最大入居数120名の建物で、18年3月15日より生徒が入寮し生活を始めた。これまで、入居希望に応えられず、そのため入学を辞退した受験生もあるので、18年度以降は、そうした問題もなくなり、世界各国、全国各地からの入学者を受け入れることが可能となる。また、通学時間を縮減し、勉学・公認団体活動や各種プログラムに対して時間を割きたいという生徒のニーズへの対応が可能となった。また、18年度より留学生の宿舎としても利用されることとなる。

VI. 社会・大学との連携

①保護者との連携

a. 保護者の会

17年度は6月3日（土）と12月17日（日）に保護者の会を実施した。全体会・クラス別懇談会・個人面談という構成で行なわれ、2回とも全体会の後、生徒寮保護者会が実施された。2回の保護者の会ともかなりの数の保護者が参加し、関心の強さが窺える。出席率の高さは、土曜日・日曜日に開催したことで参加しやすかったことも一因であろう。

②卒業生との連携

a. 同窓会

同窓会の運営体制が整い、活動内容がさらに充実してきた。17年度の学院教育への連携・協力体制も、例年通りに、学院からの依頼に対し、誠心誠意対応していただいた。学院からの依頼は、キャリア教育の一環としてのウィンターセミナーへの

講師派遣、稲稜祭での出店の協力などであった。特に、稲稜祭では学院生への同窓会グッズのプレゼントもあり、大変好評であった。

同窓会の活動としては、就職活動支援セミナーを年3回開催し、卒業生から好評を得た。さらに、同好会活動では、ビジネス交流同好会、ゴルフ同好会、地域別OB会など年々盛んになってきた。

ホームページには、クラス会の開催案内等が載り、その情報は随時更新されている。役員会も定期的に開催され、次年度に向けての活動に備えている。また久しぶりにホームカミングデイを開催するという案が提案されている。

b. ウィンターセミナー

12月9日(土)に本学院卒業生と、早稲田大学キャリアセンター、及び公認会計士協会より講師を招き8件の講義を行なった。本セミナーは、生徒が先輩の経験談を聞いて、自分の将来を考え適切な進路選択をし、自己の将来の具体的なイメージを確立することを趣旨として行なわれている。参加した生徒は熱心に聴講し、多くの質疑応答が行なわれていた。しかし、第3学年の生徒の参加が少なかった。16年度まで行なわれてきた講師と教員の夕食を兼ねた懇談会は実施せず、セミナー終了後にお茶会を行なって意見交換をした。講演後すぐに帰宅を希望する講師の方が多いための対応であった。

③地域との連携

a. 本庄稲作プロジェクト

地域と連携を図る試みとして「本庄高等学院稲作プロジェクト」を実施している。地元農家との交流を通じて、農業を取り巻く様々な事柄を体験的に学習することが目的である。農業を軸に、様々な教科や科目が横断的に取り組むことのできる企画である。17年度も美里町農林課と水田農家の協力のもと、5月下旬と10月上旬に美里町下児玉の水田で農業体験を企画した。選択科目「食文化」の授業時間帯に組み込む形で行ない、受講生19名が田植えと稲刈りを体験した。稲刈りとともに米作りのサイクルや営農に関する興味深い話を聞くことができた。刈り取った稲は、受講生により天日干しから脱穀・粃摺り・精米し、調理していただいた。農業を通じた地域との連携は着実に進んでいる。

b. どんぐりプロジェクト

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が取り組んでいる「どんぐりプロジェクト」に参加した。これは「海の針葉樹林コミュニティ支援プログラム」の一環で、東日本大震災の復興支援が目的である。宮城県気仙沼市で採取したどんぐりの種を育て、成長した苗木を現地に植樹して防潮林を形成し、防災に役立てようとするもので、生徒27名が本庄キャンパスでどんぐりの苗木の育成を行なっている。授業のある日は当番制で本庄育苗地の水やりと観察日誌の記録を行ない、学部学生やWAVOCのスタッフとの月に1回程度のミーティングでプロジェクト参加者同士の親睦を図り、活動を確認している。8月26日(土)～28日(月)には生徒24名と教員2名およびWAVOCのスタッフとともに気仙沼植樹ツアーを行ない、

現地の方々の話を聞き、今後の防災の在り方を考えるフィールドワークに参加した。

c. 六高祭

8月20日（日）に、本庄市内の6つの高校が合同で文化祭を行なう「六高祭」が開催された。この六高祭は、16年度に本庄市合併10周年・はにぽんプラザ（本庄市新施設）オープンを記念してスタートしたものである。本学院からは書道部、演劇部、美術部、映画部、ピアノ部、軽音部、SGHネパール班が参加し、日頃の成果を披露した。また、生徒会執行部のメンバーも、この「六高祭」の実行委員として活躍した。

d. ボランティア活動

17年度は以下のようなボランティア活動を行なった。

- ・第3学年による全市一斉清掃
- ・硬式野球部による野球場外側道路清掃
- ・市役所主催の花の植え付けに生徒会が参加
- ・スーパーサイエンスクラブ河川研究班による以下のプログラム
本庄市立藤田小学校での出張授業
藤田小との連携で行なっている河川環境調査活動（年2回、小山川・元小山川）

e. 施設の開放

キャンパス内への入退出管理などセキュリティの確保が難しいため、校舎・体育館などの学外への貸与は行っていない。しかし、本庄市との友好的な協力関係を維持・発展させるため、本庄市民や中学校の陸上競技大会や、公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパークと本庄市との連携事業である「こども大学ほんじょう」の修了式に会場を例外的に貸与している。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会開催にも協力している。

④教員の社会活動

a. 学会役員

魏晉南北朝史研究会監事

b. 学外委員

神奈川県立総合教育センター平成29年度国際バカロレアの理念に基づく教育に関する研究助言者

本庄市行政不服審査会委員

c. 学外講師・出張授業等

上里町賀美公民館文学講座 『源氏物語を楽しもう』

d. その他

おおくぼ山スポーツクラブ代表

日本英語検定協会英検面接委員

日本英語検定協会TEAP面接委員

埼玉県高等学校体育連盟サッカー専門部常任委員（北部広報部長）

日本サッカー協会B級指導者講習受講埼玉県トライアル参加・次年度JFA受講

推薦取得

日本サッカー協会 3 級審判員講習受講・ライセンス更新

埼玉県サッカー協会北部地区トレーニングセンタースタッフ

⑤教科書等の執筆

a. 教科書等の編集・執筆

『Producer English Expression I 』	フォーイン
『New Discovery III 』	開隆堂出版
『All Aboard! English Communication II 』	東京書籍
『国語総合』	東京書籍
『精選国語総合』	東京書籍
『新編国語総合』	東京書籍
『古典 B 』	東京書籍
『精選古典 B 』	東京書籍
『新編古典 B 』	東京書籍
『古典 A 』	東京書籍

b. 指導書・参考書の執筆

『Teacher's Manual for Producer English Expression I 』	フォーイン
『New Discovery II 』	開隆堂出版
『Teacher's Manual All Aboard! English Communication II 解説編』	東京書籍
『古典 B 』	東京書籍
『精選古典 B 』	東京書籍
『新編古典 B 』	東京書籍

⑥外部資金の導入

a. S G H (スーパーグローバルハイスクール)	7,400千円
b. さくらサイエンスプラン (科学技術振興機構)	
アジアの学生を日本に招聘し、日本の科学技術体験と国際交流を目的とする事業	
Singapore National Junior College 受け入れ資金	3,000千円
Mahidol Wittayanusorn School (Thailand) 受け入れ資金	3,000千円

⑦募金

17年度の教育振興資金寄付件数は76件、寄付金額は13,700,000円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を7件、1,162,493円を受け入れた。今後も引き続き、新体育館などの建設に向け、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

⑧大学教育との連携

a. 教育実習

17年度は2週間(5月22日(月)～6月7日(水)、9月11日(月)～9月22日

(金)) および3週間(5月22日(月)～6月1日(木))に20名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は従来の日程である5月11日(木)に行なったが、実習生がより充実した準備をして実習に臨めるよう、4月から指導担当教員と打ち合わせが開始できる体制を整えた。実習生は教壇実習および体育祭の運営や部活動指導にも参加し、学校現場の業務の体験に努めた。教育実習の反省会は2週間および3週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

b. 競技スポーツガイダンス

15年2月に実施された「コーチサミット(競技スポーツセンター主催)」に参加の際「高大一環」を村岡担当理事がコメントしたことをきっかけに、「高大連携」「競技力向上・育成」を目的とする、各運動部共通のテーマによる講演を実施した。17年度は以下の通り3回実施した。

第8回 5月10日(水) 13:50～15:40 稲稜ホール

テーマ: 第1部「早稲田本庄学院運動部に求められるもの」

第2部「アスリートのための基礎栄養学」

講師: 小林優紀氏・吉田茂氏

参加生徒: 222名 参加教員: 7名

第9回 11月1日(水) 13:50～15:40 稲稜ホール

テーマ: 第1部「運動部 緊急連絡体制と初期対応について(講義)」

第2部「運動部マネジメントケーススタディー 早稲田大学ア式蹴球部の取り組み」

講師: 宮城雄斗氏・野田紘暉氏・齋藤香織氏

参加生徒: 172名 参加教員: 5名

第10回 12月20日 学院食堂

講師: 本庄中央消防署署員(11名)

テーマ: 救急救命講習(AED講習)

参加生徒: 120名 参加教員: 5名

c. 学部・大学院の授業担当 教員アンケート→学校評価運営委員会

学部・大学院等における授業担当状況は次の通りであり、16年度から変化はない。

・文学学術院	1名
・教育・総合科学学術院	2名
・人間科学学術院	1名
・スポーツ科学学術院	1名

VII. 管理運営

①教員組織

a. 教諭会

17年度は定例教諭会が11回(入試判定会、卒業・進級判定会は除く)、臨時教諭会が12回開催された。16年度に比して回数は減ったが、臨時教諭会の中には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれる。特にスマートフォンやSNS上での生徒同士のトラブルもあった。会議時間の短縮化は喫緊の課題であったが、提案方法の見

直し、発言の簡略化、議事進行の迅速化に留意し、従前に比べて長時間にわたる会議はかなり減少したと思える。

b. 委員会

17年度は16年度と同様の17の委員会が設置された。委員会は、1年間を通じてそれぞれの役務を果たしたと考えている。18年度に向けては委員会の統廃合を行なってスリム化し、教員の業務量の軽減化を目指したい。各委員会の検討事項及び取り組みの主なものは次のとおりである。

教科主任会：予算関係、図書委員会開催、選択科目登録時の細目決定、委員会の統廃合検討、第1学年芸術科目の選択について、理工学術院、及び社会科学学術院の英語学位プログラムへの対応、SSH申請検討、生徒寮の教育プログラム検討、年間行事の検討、卒業論文の学外発表、投稿規程の検討、英語圏海外協定校の開発検討、進学基準の検討と確定、修学旅行の日数検討、環境エネルギー大学院との連携検討、留学の内規や扱い、特に帰国後の理数科確認テストの整備検討、専任教員募集要項の改定、その他教諭会審議事項の事前検討。

学年主任会：奨学生の選考、生徒表彰の選考。

生徒指導委員会：日常の生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、問題行動が発生した際の事実確認と生活指導計画の立案と実施、及び外部有識者による教員研修実施。

いじめ防止委員会：生徒間のいじめ問題の防止やいじめ問題に関しての外部有識者による教員研修実施。

人権教育委員会：人権教育講演会の実施、人権教育の実践報告。

寮委員会：生徒寮の生活指導、寮規則の検討。

広報・出版委員会：『杜』・『研究紀要』の編集刊行。

情報管理運営委員会：全般的情報の管理、授業評価の実施。

入試検討委員会：『学院案内』の入試部分の作成、指定校の決定、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加、入学試験要項の作成等。

施設検討委員会：新体育館フロアの具体的計画の検討。

進路指導委員会：各種セミナー（サマーセミナー、ウインターセミナー）、進学準備ウイークの立案及び実施、卒業論文報告会の準備及び実施、学部説明会の検討、卒業論文の評価や手引書の改訂、提出時期等の検討。

学校行事運営委員会：体育祭、稲稜祭の立案及び運営、芸術鑑賞会の検討。

SSH委員会：SSH事業の立案及び実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、SSH成果報告会の立案及び実施、文部科学省へのSSH再申請。

SGH委員会：SGH事業の立案及び実施、生徒SGH委員会の組織運営、各種交流事業や調査旅行への生徒引率、SGH成果報告会の立案及び実施、文部科学省への年度末報告、SGH成果報告書作成。

国内外交流委員会：台湾国立第一高級中学、NJC来校時の対応、留学生の受け入れ検討、各種プログラムの引率。

学校評価運営委員会：学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成。

募金委員会・同窓会係：教育環境整備・充実募金の企画と募金活動、同窓会活動への参加と協力。

c. 教科別構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。前年度から専任教諭の増減はなかった。

教科別構成

教 科	専任教諭	非常勤講師	合計
国 語 科	5	6	11
地理歴史・公民科	7	15	22
理 科	6	5	11
数 学 科	7	6	13
保健体育科	5	4	9
芸 術 科	1	2	3
英 語 科	9	7	16
情 報 科	1	2	3
家 庭 科	1	1	2
第二外国語	0	4	4
養 護	1	0	1
合 計	43	52	95

年齢別構成

資 格	人数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	2	5%	10	23%	13	30%	8	19%	10	23%
非常勤講師	52	19	37%	14	27%	6	12%	8	15%	5	10%
全 体	95	21	22%	24	25%	19	20%	16	17%	15	16%

男女別構成

資 格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	37	86%	6	14%
非常勤講師	52	36	69%	16	31%
全 体	95	73	77%	22	23%

d. 教員の授業担当時間

17年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。16年度から大きな変動はない。

専任教員	14.1時間（除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭）
役職者以外	15.0時間
役職者（教務）	7.8時間
非常勤講師	6.7時間

②事務組織

事務職員の担当別人数は次の表の通りである。専任職員および嘱託の嘱任・解任および配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては、大学が契約窓口となり人材サービス会社から派遣されている。なお図書室は、16年度より業務委託となっている。

担当箇所・係	人数計	内 訳		
		専任職員	嘱託	派遣
事務職員計	16	7	3	6
事務所	13	7	2	4
事務長	1	1	0	0
学務係	5	3	0	2
庶務係	6	3	1	2
S G H 支援	1	0	1	0
理科準備室	2	0	1	1
物理・生物	1	0	1	0
地学・化学	1	0	0	1
メディアルーム	1	0	0	1
C A L L 教室	1	0	0	1
図書室	業務委託			

③生徒の出欠席・成績処理

早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「School N@vigator」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。具体的な運用は以下の通りである。

出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。

成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

④広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。『緑風』は6月と12月に発行し、教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されて

いる。『杜』は保護者の会「杜」編集委員会により、年1回、3月に発行される「保護者の会だより」で、同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

ホームページ (<https://www.waseda.jp/school/honjo/>) ではタイムリーなニュースやできごとを継続的に発信しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行なっている。ホームページにおける課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自のHPがある公認団体（クラブ）は、URLも掲載し、クラブ独自の情報発信も行なっている。

また、本学院保護者へ迅速かつ確実に情報を伝達するため、FairCast®（NTTデータ(株)提供）システムを導入している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。